

「人権について考える」編

-人権教育講演会・人権意見作文発表会の感想-

人権教育講演会 11月13日(金)に阿波市から十川勝幸先生をお招きして「ハンセン病」について、お話しをしていただきました。

私は今まで、ハンセン病のことについて詳しく知りませんでした。社会や道徳などの授業で少し習っただけでした。十川さんにお話しを聞いて、ハンセン病のことについてやハンセン病患者の方について、そして、周囲の反応についてもよく知ることができました。



十川さんに初めて「人権とは何だと思えますか。」と聞かれたときに、私は答えが見つかりませんでした。「人権とは人が幸せに生きる権利」だと教えていただいたとき、ハッとしました。私は、それは一番大切にしなければならぬことだと思えます。私が今、大切な家族と暮らして、大好きな友達や先生に毎日会えることは、かけがえのないものだと思えます。

私は青松園の入居者の方々と直接会って話してみたいと強く思いました。そして、十川さんや知事さんのような方が「当たり前」になってほしいと思いました。

私が今幸せに暮らしているように、誰にでも幸せに生きる権利があります。それが「ハンセン病」という病気にかかっているというだけで周囲の人からだけでなく、自分の家族にまでも恐れられ、家に帰るといふことすら許されないのは本当に本当におかしいです。

今はコロナウイルスという新しい病気が人々を苦しめています。私はハンセン病の時のように、人権までも奪われる世の中にはしたくないです。今、人権を奪われ苦しんでいる人が、少しでも、1人でも減るように、私にできることを精一杯やりたいです。(3A 井藤 陽依)

「事実を知らない」ことによって、知らず知らずのうちに人権を侵害してしまうことがあるのだということにあらためて気づきました。

ハンセン病は治りうる病気になったにもかかわらず、「らい予防法」が廃止されるまでの間、患者の方たちは「隔離」され続けたということを知りました。このことによって回復者のみなさんが味わった苦い体験、そして現在の思いなどについて語ってくださった十川さんのお話や、いただいた資料を読むことを通して、いろいろと考えました。

言葉では言い表せないほどの苦しい忍耐の時間が続いた長い道のりを乗り越えて、十川さんとともに社会復帰を目指す指し頑張ってこられたハンセン病回復者のみなさんに尊敬の思いが溢れます。私たちはこれから自分たちができることをしっかりと考えて、今日学んだことを周りの人や次の世代に伝えていきたいと思えます。

今私たちがしなければならないことは、ハンセン病のことを正しく理解し、ハンセン病に対する偏見や差別をなくすることです。私たちが正しい知識を深めることで、回復者の方々の生活圏を広げることができ、みんなが共に生き生きとした毎日を通していける世の中にしていくことができると思えます。本当に多くの大切なことに気づくことができた講演会でした。(3B 庄野 桜汰)

十川さんのお話を聞いて、私はハンセン病の元患者さんに対する偏見や差別が本当にひどいものだったことや、その恐ろしさを改めて痛感しました。そして、このことが繰り返されないように、私たちは未知のウイルスや感染症について正しく知る必要があると思えます。

私は十川さんのお話の中で「一隅を照らす」という言葉がとても印象に残っています。



私としても、ハンセン病の患者さんには結びつけることはできなかったと思えます。そして、十川さんがハンセン病患者さんに焦点を当てていなければ、私たちはこの病気やそのことでも知らなかったかと思えます。

ハンセン病の元患者さんの平均年齢が80歳を越えているということを知りました。そこで、これからは私たちのように若い世代が、今回聞いた内容などを伝えていかなければならないと感じました。偏見や差別のない社会を作りたいです。(3A 藤田 咲良)

2時間という短い時間でしたが、その間にハンセン病に対する社会の実態を学んだり、人権や差別の問題についてたくさん考えたりすることができ、とても有意義な時間になりました。

今まで私は、「ハンセン病」という病気があること、差別が起きてしまっていたことしか知りませんでした。しかし、十川さんのお話を聞いて、ハンセン病がどれほど感染力の弱い病気なのか、差別がどれほど残酷で無慈悲なものかを学びました。私が十川さんのお話の中で最も心に残っているのは「地球上で一番遠いところがふるさと」という言葉です。地球上で一番遠いところをそのまま考えると、日本の真反対に位置する南米が浮かび上がります。しかし、患者さんにとっては飛行機で25時間もの間揺られてやっと到着するブラジルよりも、行くのに半日もかからないふるさとの方がずっと遠いものだと考えると、無知が生み出した差別のむごさを感じました。これを二度と繰り返してはいけません。現代では、情報網が発達し、知らないことから怯えて差別に走るということも少なくなったと思えます。



しかし、それでもコロナ感染者への誹謗中傷は起ちてきています。私は相手の気持ちを考え、言葉や行動をとることが最もシンプルで、最も難しく、最も大切にすべきことだと考えています。不安なときこそ、相手のことを考えて団結したいと思えます。(3A 谷 夢叶)

十川先生が最初におっしゃった「人権とは人が幸せに生きる権利」という言葉がとても心に残りました。ハンセン病について正しい知識をもつことが偏見や差別をなくすための第一歩だと感じました。十川先生のお話の中で一番衝撃を受けたのが、入所者の方々は療養所の外に出たことがないので、赤信号で止まるということがわからないとの話です。何十年も療養所で生活していると、普段私たちが当たり前前にしていることも忘れてしまおうと知り、どれだけ閉ざされた空間の中で生活しているかがわかりました。入所者の方々と京都や大阪、兵庫に行くと行く前とは入所者の方々の気持ちが大きく変わったのは生きることの喜びを感じ、前向きになることができたからだと思います。また、入所者の方々の家族も偏見をもっているためふるさとへ帰れないという話を聞いた時も驚きました。自分の兄弟にまで偏見をもたれていると聞いただけでも悲しくなります。ハンセン病についてよく知らない多くの人たちが正しい知識をもつことで、偏見や差別心をもつ人を変えられるのではないと思えます。十川先生の話や講演を聞いて、ハンセン病や療養所の入所者の方々の思いを知ることができました。大島青生園に行けるようになったら行ってみたいと思えます。(3B 久榮 ほか)

らい病にかかっていない人が「鼻がなくなる」「目がなくなる」などと恐れる必要もないようなことを恐れ、らい病にかかっていた人のことを差別していたということを知り、とても驚きました。また、らい病にかかった人の中には、家族に恐れられて故郷に帰れない人がいるということを知り、悲しくなりました。家族に嫌われるなど、想像しただけで胸が痛みます。また、パンフレットを読んでいると、家族に「戻ってくるか」と言われているのに、周辺や若い先のことを考えると帰れない人がいて、可哀想だと思えます。



また、十川さんが回復した人たちと一緒に大阪や京都へ旅行に行き、大島の施設で「このままずっと置いていただけて結構」と、そのまま人生を終えようとしていた人たちが、「来年も行きたい」「長生きせなあかん」と言うようになったという話を聞いて、なぜか自分まで嬉しくなりました。十川さんはそのようなところにやりがいを感じるおっしゃっていたので、僕も人を喜ばせられるような職業に就きたいと思えます。(3B 吉本 藍)

「頭でわかる」と「心でわかる」は違うという言葉がとても印象に残っています。今まで障がい者問題をはじめ、様々な人権問題について学び理解してきましたが、その理解は「頭でわかっていた」だけだったのかも知れません。

現在新型コロナウイルス感染者への理解は深まってきました。しかし、初期はクルーズ船に乗っていただけで周囲からの差別や偏見がありました。現在そういったことが

ないのは、新型コロナウイルスについて「心でわかる」人が正しい知識の広まりによって増えたからだと考えます。ハンセン病も正しい知識があれば、これほどひどい人権問題にならなかったでしょう。僕はこれから様々な人権問題に「心でわかる」人となり、誰にでも親密に接することができるようにしたいと思います。(3B 吉田 新一郎)

人権意見作文発表会 12月11日(金)に令和2年度人権意見作文発表会が行われました。各学級代表1人ずつが人権意見作文を発表しました。3年生からは、3A藤目心海さんと3B山上愛結さんが代表で発表しました。

6人の人権意見作文を聞いた中で、深く心に残っている言葉があります。1つ目は『「〇〇なのに」という固定観念のせいで、その人らしさを失ってしまうことはあってはならない』という言葉です。正直、僕は女子がズボンをはいて歩いているのを見た時に違和感を感じます。「何か変だ」と感じてしまうのです。でも、よく考えれば確かに珍しいかも知れませんが、変ではないはず。普段ズボン姿の女の人を見ても何も感じないのに、制服になった途端に変だと感じるのはおかしいと思います。そうした周囲の目を気にして自分らしく行動できない人もいます。「その人らしさを尊重していきたい」と思います。

2つ目は、「普通とは何なのか」という言葉です。当たり前、みんなと同じようにしていれば普通なのではないか。普通でなければいけないのでしょうか。「自分たちの普通を障がい者にも押しつけていた」という言葉もありました。その通りだと思いました。自分たちができることがあの人にはできない。だからあの人普通じゃない。普通じゃない人はおかしい。そういう考えが世の中にはあると思います。自分と全く同じ人なんていないのに、違いが大きだけで差別するのはおかしいと思います。「その人らしさ」を大切に、相手の違いを受け入れて誰もが生きやすい社会にしていきたいです。(3A 岡久 颯真)

特に印象に残ったのは、藤目さんの発表です。視覚障がいのある友達は、何でもできる友達だと思っていたけど、実は、それは並々ならぬ努力のたまものだったという話でした。ヘレン・ケラーが三重苦を乗り越えることができたのも、努力の積み重ねがあったからだと思います。苦手なことがある人は苦手な分だけ努力して追いつこうと頑張っていると、藤目さんの発表を聞いて改めて感じました。

最近、道徳が教科としてみんなが学ぶようになってから、人権について考える機会が以前より増えました。でも、そう言った今でも、知らず知らずのうちに友達を不快にさせるようなことを言ってしまう、逆に自分がちょっとしたことでも傷ついたりすることがあります。人権は大事だとはわかっていますが、私たちの心に根付く「当たり前」の概念を崩すことは簡単なことではないと思いました。(3A 高木 希望)

今回の発表会の中で、僕は特に1BHRの岸本さんが言っていた、「障がいも1つの個性として考える」という言葉がとても心に残りました。僕も心の中で、障がい者は普通の人とは少し違うと考えていました。しかし、考えてみれば、僕は眼鏡をかけています。そのため、僕は他人とは少し違うということになります。しかし、世の中では、眼鏡をかけているだけで障がい者として扱われることは、まずありません。そう考えていくと、障がい者を普通の人とは違うと考えることはおかしいと感じました。僕は目が悪くから眼鏡をかけています。障がいのある方も、体、もしくは精神面の一部が異なっているだけで、他はみんな一緒です。つまり、僕とも他の誰とも差はありません。

そもそも、「普通」の定義も不安定なものです。人によってそれぞれ価値観は変わります。それなのに、自分の価値観だけを自分勝手に相手に押しつけるのは好ましくない行動です。僕は改めて、「個性」や「普通」ということについて考えようと思いました。(3A 肥野 佑次)

今日、前で発表してくれた6人の中で、藤目さんと山上さんの発表が一番心に残った。僕自身、小学校の時に看護とまではいかないが、助けが必要だった時期があった。その時に強く感じたことは、「何もかもすぐに手助けされることへの疑問」と「周りからの視線」だった。手助けが必要だといっても、1人では何もできないという訳ではない。自分でできることもあるし、できることは自分でやりたい。それは障がい者の方も同じだと思う。中には「障がい者の方には積極的に手助けをするべきだ。」という意見の人もいた。でも、その行動が逆に相手を苦しめてしまっていることもある。また、手助けをされていると、どうしても周りの反応が気になってしまう。僕は、すごく興味ありげな感じでながめられていると感じたこともあった。みんなの優しい気持ちがあつてこそその行動ということにはわかってい

ても、何か自分は他の人とは違うと区別されているような気持ちはずっと心にひっかかっていた印象が、今でも強く残っている。だから、今日の藤目さんの「障がい者だから助けようではなく、困っているから助けよう」という言葉に深く共感してしまった。今では僕も手助けは必要なくなっている。今度は僕が自分の過去の経験を活かして手助けする番だと思う。「障がいがあってもなくても関係ない。困っていたら助ける。」このことを改めて感じる事ができたと思う。(3A 北條 智哉)



クラス代表のみなさんの発表はとても聞きやすく、心に響きました。特に心に残っているのは、1BHRの岸本さんの発表です。目が悪い人が眼鏡をかけているのと同じように、耳が悪い人は補聴器をつけていると聞いて、確かにそうだな、変わらないなと思いました。今までそんな風に考えたことがなかったので少し驚きました。しかし、目が悪いのか耳が悪いのか、それだけで障がい者でないかどうか勝手に決められているのは確かにおかしいと思います。そのあと岸本さんが言っていた例を聞いて、2つずつ比べてみて、あまり変わらないのに考え方が変わったり見方が変わったりするのはなぜだろうと少し考えてみましたが、私にはよくわかりませんでした。後で岸本さんが言っていたことを聞いて、なるほどと思いました。それは、自分のことを普通として自分の普通を作っているというように決まっていた。それを聞いて、確かに自分を基準として普通を決めているということに気づきました。障がいがある人を自分の普通と比べて障がい者かどうかを決めている人だと思いました。こういう普通がなければ障がい者とそうでない人の違いはないのだろうと思いました。こういう風に考えることができよかったです。(3B 芳川 菜々)

山上さんは「日本は心のバリアフリーが足りないと言われるのが不思議です。」と言っていました。意外でした。大半の人は人権の話になると、「〇〇が足りない。できていない。だから私たちは～しなくてはならない。」と言います。しかし、山上さんは「皆が自分に優しくしてくれて嬉しかったです。」と言っていました。特に今日のような人権意見を述べる場では、現状でできていないことに焦点が当たることが多いと思います。正直、僕は今まではいつも、「またか」と思い、このような場が嫌でした。だから、今日山上さんの感謝を述べた発表を聞いて、僕は感動しました。山上さんのように感謝を述べた人は今まで見たことがなかったからです。優しい人だと思いました。山上さんも、山上さんを助けた人たちも、他人を助けられるのは、その人が優しいからです。他人の優しさに気づき感謝できるのは、その人が優しいからです。(3B 渡辺 沢巳)

特に私の心に残っている言葉は1Aの漆原さんが言っていた「障がいというイメージを改め、その人の人生を輝かせたい」という言葉です。少しあやふやな部分がありますが、「その人の人生を輝かせたい」という思いが本当にかっこいいと思いました。誰に対しても思いやりの心をもつ、困っている人に「大丈夫ですか？」と声をかける。決して簡単なことではありませんが、出来ると自分まで嬉しい気持ちになると思います。他の人を輝かせるためには、自分の改めなければならないところは改め、自分も輝けるように努力することが大前提にあると思います。だから私も彼女のように素敵な気持ちをもてる人になりたいと思います。

自分の書いた人権作文も、今回聞いた人権作文も全てこれからの明るい社会を作っていくために考えなければならぬことばかりです。「〇〇はダメ」「こういう考え方をしたほうがいい」ときれいな事もあると思います。ですが、そのきれいな事を自分たちの親しみやすい目標に変え、社会をよりよくしたいです。(3B 仁義 実尋)

私は今まで、小学生の頃からたくさんの人権問題について学習してきました。しかし、その学びを自分の身近で起こりうる出来事としてはとらえられていなかったように思います。しかし今回の発表会に参加して、私の考えは大きく変化しました。人権問題は今もなおたくさん存在し、日常の色々な場面で起こる可能性があるという事実を知ったうえで生活していかなければならないのだと思います。発表していた全員が言っていた「自分たちの何気ない一言、行動が差別や偏見を生み、自分の少しの行動が差別解消につながっていく」ということを知った今の私だからこそできることがあると思います。それを行動にうつすことは勇気が必要かもしれません。しかし、全ての人が笑顔で暮らしている社会を1日でも早く実現するために、自分が今出来ることは何かを考えて行動していきたいです。(3B 祖父江 結子)

今回、ほんの一部の人の感想文しか掲載することができないのが残念なほどたくさん素晴らしい意見・感想がありました。また、3月発行の校誌「唐梅」にも何人かの感想文が掲載予定です。